

# 極小未熟児の親子関係

—入院中における両親の心理的・情動的变化—

竹内 徹（大阪府立母子保健総合  
医療センター周産期第2部）

藤村 正哲（ ” ）

横尾 京子（ ” ）

## 目 的

昭和57年度は、「未熟児における母子相互作用」とくに母子対面場面にみられる母親の行動を、初対面場面についてVTRにより分析した結果を報告した<sup>1)</sup>。また同時に予報的研究として、母子対面場面の継続的観察を行ない、次の四場面の子ども、すなわち(I)保育器内の子、(II)常時保育器内にいるが数分抱いて器外保育の可能な状態の子、(III)常時コットにいるが抱いて哺乳ビンで授乳可能となった子、および(IV)沐浴等の保育場面で様々な世話のできる子（退院直前）に対する母親の行動分析も行なった。この場合、同時に面接を行ない、母親の心理面での変化と対応させるよう努力した。しかし出生が院内か院外かによって対面場面と母親の面会経験回数とは必ずしも一致しなかったこと、また症例が10例に限定されたことから、母親の心理的・情動的变化を共通したものとして把握できなかつた。

そこで今回は、期間を分娩直後から児の出生後入院中に限定して、その間の両親の心理的・情動的变化を知る目的で、とくに医療および看護内容の変化する場面对応させながら、アンケート形式で調査した。

## 対象および方法

昭和56年10月末の当大阪府立母子保健総合医療センター（以下センターと略す）開所以来、昭和58年2月15日現在までに、新生児特殊看護室を退院した極小未熟児67名を対象として調査を行なった。（当センターの特殊看護室には、集中看護用ベッド20床、回復期・成長期用コット40床がある。）以上67名中、転院したもの8名、育児障害のため再入院した1名あわせて計9名は除外した。残る57名中、双胎が3組含まれ

ていたため、家族数としては54家族であった。これら54家族に対し、16項目にわたるアンケート調査を行なった。アンケートの内容は、妊娠・分娩とくに分娩直後の接触時、初回対面時、入院中の児の経過と母性意識の変化、器外保育可能になった時期の接触（抱く・授乳するなど）、および退院準備期、退院時などの児の身体的推移に対応した時期における、両親の心理的・情動的变化を調査する目的で作製した。なおアンケートは退院時に手渡し、初回外来受診時持参することを原則としたが、今回は郵送による回答の返送形式をとったものが多かった。また同一内容のアンケートを両親に一部ずつ手渡し、父親および母親別々に回答してもらった。

## 結 果

アンケート調査の回収率は、76%（54家族中41家族より回収）であり、母子家庭が1家庭あったので、回答数は、父親総数40名（回収率95%）、母親総数41名（回収率76%）であった。なお双胎が3組あったので、乳児総数としては44名であった（双生児は全例院内出生であった）。対象について特徴のある点は、表1に示したように、極小未熟児でも、院内出生が33例（80.5%）、院外出生すなわち新生児搬送の対象となったものは8例（19.5%）であり、母親が分娩まで、それぞれ一定期間当センターに紹介入院の形をとったものが多かった。これら極小未熟児には、性差はなく、母親の分娩歴で初産・経産はほぼ同数であったが、分娩様式は、帝王切開率が高く、53.7%であり、しかも全員センター内出生であった。ハイリスク妊娠がいかにか多いかを表わしている。以下とくに両親の心理的・情動的变化および行動上に変化のみられる場面を、前回の観

察結果を参考にして、項目別に記載してその結果の概略を述べる。

### 1) 分娩直後の対面場面

「分娩直後赤ちゃんとのような対面をしましたか、○をつけて下さい」との質問に対して、「赤ちゃんをみた」が母親26名(3名)(以下カッコ内はすべて院外出生児を示す)、父親26名(8名)で、そのときさわったもの母親5名(1名)、父親6名(0名)であった。また搬送例新生児の3例は、ポラロイド写真で児を見たという回答、児を抱いたという例は、対象が極小未熟児であることから、全くなかった。なお、「全然見なかった」という母親が2名(1名)あったが、院内出生2例では、全身麻酔(帝切の際)を受けた例であり、それぞれ生後3日目と7日目にNICU内で対面しており、院外例も20日目に初回対面を行っていた。分娩直後に何らかの形で児と接触したものは、母親75.6%(50%)、父親80%(100%)であった。

「分娩直後に赤ちゃんを直接見た時のお気持ちはどうでしたか」との質問に対しては、表2に示したように、小さいという身体的特徴に対しては卒直に驚き、また心配しているが、児の活動性に依りて、積極的な反応がみられ、助からないと思ったものは、母親1名(2名)、父親1名(2名)と、非常に少なく、また将来の障害の可能性に対して心配したのは母親より父親であり、父親の反応の方が、直接的でなく冷静であるような印象を与えた。

### 2) 早期接触の場面

「赤ちゃんにはじめてさわったのはいつ頃でしたか」の質問に対して、母33名(8名)、父32名(8名)についての時期的分布は、図1に示したとおりである。院内出生例では、母親は生後12日以内に全員接触しており、父親は16名(50%)が生後1週以内に、あと半数は入院中に接触していた。当然のことながら、院外出生例では、接触の時期は遅れ、母親は生後8日以後、父親は7日以後になっている。なお1例の父親は、全く接触しておらず、入院時に対面しただけであった。

「はじめて赤ちゃんにさわった時のお気持ちはどうでしたか」の質問に対する回答内容は表3に示した。一応(1)積極的(表中◎じるし)、(2)消極

的(△じるし)および(3)両個性傾向(○じるし)としてみると、それぞれ母親23%(37%)、父親40%(12.5%)、(2)母親48%(63%)、父親31.4%(37.5%)、(3)母親21%(0%)、父親14.3%(25%)であった。無回答は母親に2名(6%)、院外例0名、父親5名(14.3%)院外例2名(25%)であった。

### 3) 器外保育が可能になった時期の対面場面

「はじめて赤ちゃんを抱いたのはいつ頃でしたか」の質問に対しては、院内・院外出生にかかわらず、母親は生後2か月以内にほとんど全員が抱く経験をしており、同期間内の父親では、32名中25名(8名中5名)であった。全然抱かなかった母親はいないが、父親では院内出生例で3名、無回答は父親で3名(2名)であった。

なお「はじめて抱いた時のお気持ちはどうでしたか」の質問に対する回答は、表4に示した。表3の場合と同じく、(1)積極的(◎)、(2)消極的(△)および(3)両個性傾向(○)をみると、(1)母親では67%(75%)、父親43.8%(12.5%)、(2)母親15%(25%)、父親25%(12.5%)、(3)母親15%(0%)、父親12.5%(25%)であった。なお無回答数は、母親で1名(0名)、父親で6名(2名)であった。

「はじめて授乳した時のお気持ちはどうでしたか」の質問に対しては、うまく飲んでくれたよこび、吸う力の強さに感激、成長に対する感動、親としての実感など積極的感情を表明したものは、母親22名(3名)、父親12名(4名)、以上とは反対に何らかの心配・不安を感じたものは、母親5名(5名)、父親5名(2名)であった。なお無回答は母親6名(0名)、父親15名(2名)であり、総じて父親は、感情をあまり明確に表明していないように思われた。また授乳への積極的参加が少ないためであろうと思われる。

### 4) 入院経過中の両親の心理的・情動的反応の変化

面会を重ねるうちにわが子への気持ちが変化したかどうかの質問に対しては、「変化した」と明記したものは、母親25名(7名)、父親17名(5名)であった。なお積極的な気持を表明したものは、内容が多様で、また母親の方が父親よりもその傾向が強かった。したがって、両親・院内

外を区別せずにあわせると、親としての実感がわいた：2名、かわいくて仕方がない：1名、早くつれて帰りたい：10名、成長がうれしい：4名、面会が待ちどおしくそばにいたい：3名、抱いてやれる満足感：1名、早く元気に大きくなってほしい：1名、未熟もふつうと変らない：1名、晴れもあり曇りもあり：1名、などであった。

「変化なし」と答えたのは、母親8名(1名)、父親13名(2名)で、無回答は父親2名(1名)、にみられた。このうち院内児母親8名の内わけは、わが子を抱いた場面では、4名が「いとおしい」、3名が「うれしい」、1名が無回答であったことから、設問の仕方に問題があった結果とおもわれる。

#### 5) 退院時の両親の反応

当センター入院児の退院時体重は、平均約2200-2300gである。退院時の気持は、母親について集計した結果では、「うれしかった」19名(6名)、「うれしいけれども心配」11名(2名)「不安だった」(病院においてほしい)3名(0名)で、うれしさと心配・不安が共存しているものが多いことがわかった。(父親については設問せず。)

退院時の不安・心配事については、育児および環境に対する不安が、母親13名(2名)、父親11名(2名)、身体的な面では、感染症(とくに風邪)または他の病気になった時の不安が多く、母親15名(3名)、父親10名(5名)で、発達面手後面に関しては特記したものは以外に少なく、院外出生児の父母にそれぞれ1名と、院内出生児の父親に2名あった。「心配なし」と積極的に答えたもの、母親2名、父親4名で、院外出生児の両親には無かった。ただ一方「すべてが不安」と答えたものもあり母親5名(3名)であった。また無回答は母親1名、父親7名であった。

#### 6) その他

その他NICUに初回入室時の感想について質問した結果では、設備に対してまた全体的なふんい気に対する反応は強く、「設備がよくて安心」が圧倒的に多く、「清潔」がこれにつき、その他、戸惑った、おどろいた、大変な所、心配などもみられた。しかしこわさを表明した返答はみられなかった。

一方看護内容の変化と、それに対応した両親の

反応を調査したが、重複形式の返答を求めたので、一定の傾向を把握できなかった。しかし両親共に入院中最も安心した時はいつかについては、児の急性期では、母親には、初対面・最初の接触時と答えたものが多く、その後は両親共に、人工呼吸器がとれた時(人工呼吸器使用児のほとんど全員)点滴が完全にとれた時、鼻腔内栄養チューブがとれた時、モニターがとれた時などに強い安心感を表明した。回復期では、保育器から出た時が圧倒的に多く、その後は、哺乳ビンでミルクを飲みはじめた時、授乳できた時には、とくに母親が多く安心感を表明している。

#### 考按および結語

当センターの特徴は、ハイリスク妊婦およびハイリスク新生児の積極的な取り扱いを24時間体制で行っている関係上、最近極小未熟児は出生後搬送されてくる場合よりは、母体の適応によってハイリスク胎児の形で入院することが多いことである。またたとえ極小未熟児であっても、分娩室で母子の対面が行われることが多い。さらに分娩後は、たとえ帝王切開の母親でも、入院中1日数回にわたって面会する機会が与えられている。24時間父母の入室には制限を加えていないので、とくに母親は退院迄に急性期からでも頻回に面会することができる。このことは、たとえ極小未熟児であっても、児の臨床経過とともに母親が児に愛着をいまくことを促進するものと思われる。

今回は院内出生児の母親について、毎日の面会回数を正確に把握していなかったため、院外出生児の場合と対比できなかったこと、また院外出生児数が少なかったことなどから、統計的処理はできなかった。しかし院外出生児の両親も、生後一週後より来院して面会できることが多く、また院外・院内の差なく、両親を指導し、早期から保育参加を推めているので、入院中の両親とくに母親の心理的・情動的反応には、著明な差が認められなかった。

極小未熟児の生活管理は、入院中から長期的なスケジュールによって行われるべきであり、退院をもって終るものではない。とくに身体的・医学的な問題はもちろんのこと、発達心理面からみた両親および家族全体に対する配慮もわすれてはな

ない。<sup>2)</sup> 今回の調査では、医療従事者および患児だけでなく、両親を含めたシステムを考え、どのような場面でどのように援助するのが適切であるかどうかを知るための資料を得ることも目的の一つであった。その意味では、児の臨床的経過および看護内容に対応した両親の心理的・情動的变化をある程度明確にできたものと思われる。さらにまた本調査を通じて感じられたことは、NICUを含む特殊看護室は、たしかに極小未熟児に対しても高度の周産期医療の実践する場所であることにはちがいないが、同時に親子関係を成立させていく場としても大切なこと、またそのための配慮をそれぞれの施設に則した形で考えるべきではなかろうかということである。

## 文 献

- 1) 竹内徹, 藤村正哲: 未熟児における母子相互作用 — 母子対面場面にみられる母親の行動。昭和56年度厚生省心身障害研究「母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義」に関する研究報告書, 厚生省, 昭和57年3月, 268頁。
- 2) 竹内徹: 保育器養護児の母子間における問題点。日本新生児学会雑誌18巻(1号)20頁, 昭和57年。
- 3) 竹内徹, 松本千草, 横尾京子: 慢性疾患の生活管理 — 極小未熟児 — 小児科診療・46巻(3号), 昭58, 137頁。

表1. 対象となった極小未熟児の内わけ

	院内出生	院外出生	合 計	総 計	
出生時体重 (g)	<1000	13	2	15(34.1)	44
	>1000	23	6	29(65.9)	
	<1500				
性	♂	17	3	20(44.4)	44
	♀	19	5	24(55.6)	
分娩様式	経膈	11	8	19(46.3)	41
	帝切	22	0	22(53.7)	
分娩回数	初産	15	4	19(46.3)	41
	経産	18	4	22(53.7)	

( )内は%

表2. 分娩直後に赤ちゃんを直接みた時のお気持ちは  
 どうでしたか。

	母 親		父 親	
	IN	OUT	IN	OUT
助からないと思った	1	2	1	2
小さいので驚いた, 心配	14		12	6
痛々しくてかわいそう	1	1		
動いているので安心した	3			
泣いているので安心した			4	
とくに心配なかった	2			
うれしかった, 安心した	4			
思ったより大きかった	2			
助かってよかった	2			
助かるとは思うが障害が心配	2		15	
合 計	31	3	32	8
総 計	34		40	

表3. はじめて赤ちゃんにさわった時のお気持ちはどうでしたか。

	母 親		父 親	
	IN	OUT	IN	OUT
△ 痛々しくてこわれそう, こわかった	10	5	10	3
△ 小さく産んですまない, かわってやりたい	6			
○ こわさの中にうれしい, かわいさを感じた	7			
不思議な気持ち			1	
小さいなあ			1	
複雑な気持ち			1	1
元気に育つかどうか心配			1	
自分の子どもなのかなあ			1	
△ 気もち悪い			1	
◎ うれしかった, 安心した	6	1	10	
◎ 元気に育ってほしい	2	1	2	1
◎ 自分の子としての実感がわいた		1	2	
○ スタッフに対する感謝の気持ち				1
無 回 答	2		5	2
合 計	33	8	35	8
総 計	41		43	

表4. はじめて赤ちゃんを抱いた時のお気持ちは  
 どうでしたか。

	母 親		父 親	
	IN	OUT	IN	OUT
△ こわい	4	2	6	
△ 実感がわかない	1			
軽い			2	1
○ こわいけどうれしい	5			2
将来の不安を感じた			2	
立派に育ててほしい			2	
◎ うれしい, 感激	18	4	10	3
◎ 愛しい	4	2	4	
無回答	1		6	2
合 計	33	8	32	8
総 計	41		40	

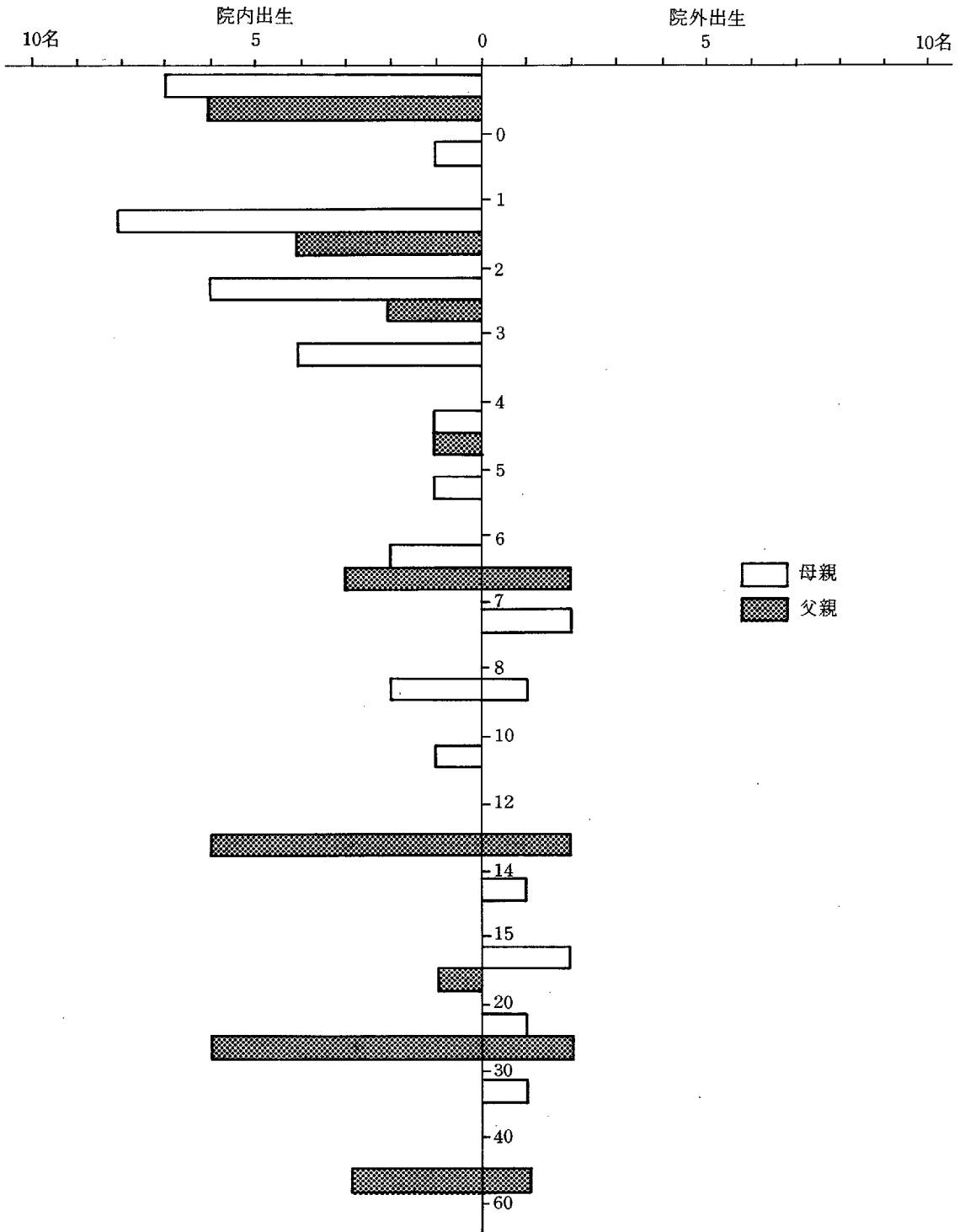
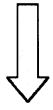
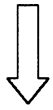


図1 子どもに初めてさわった時期(院内・院外出生児の両親)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 目的

昭和 57 年度は、「未熟児における母子相互作用」とくに母子対面場面にみられる母親の行動を、初対面場面について VTR により分析した結果を報告した。また同時に予報的研究として、母子対面場面の継続的観察を行ない、次の四場面の子ども、すなわち( )保育器内の子、( )常時保育器内にいるが数分抱いて器外保育の可能な状態の子、( )常時コットにいるが抱いて哺乳ピンで授乳可能となった子、および( )沐浴等の保育場面で様々な世話のできる子(退院直前)に対する母親の行動分析も行なった。この場合、同時に面接を行ない、母親の心理面での変化と対応させるよう努力した。しかし出生が院内か院外かによって対面場面と母親の面会経験回数とは必ずしも一致しなかったこと、また症例が 10 例に限定されたことから、母親の心理的・情動的变化を共通したものとして把握できなかった。

そこで今回は、期間を分娩直後から児の出生後入院中に限定して、その間の両親の心理的・情動的变化を知る目的で、とくに医療および看護内容の変化する場面と対応させながら、アンケート形式で調査した。